

でピッチを抽出するとともにPPU末2拍については各拍末のF0値や拍内のF0のピーク値、パワー値を計測した。

<3> サウンドスペクトログラム(注6)でポーズの時間長、句(PPU)の時間長を計測するとともに、PPU末2拍については各拍の時間長も計測した。

<4> 測定ミスをチェックし、明らかに倍音を拾ってしまった箇所や途切れてしまった箇所を補足修正した。

<5> 各話者のピッチ、パワーなどのデータを標準化し、相互比較できるようにした。(標準化(standardization)とは、複数のグループ間での比較のために、偏差値のように各グループの平均が0、分散が1になるよう置き換える統計処理(石村他1997)のことである。)

<6> 以上の手順によって得られたデータをもとに判別分析を行い、句末イントネーションの類型化を試みた。(判別分析とは、各ケースが説明変数から作られた合成変量の値の大小から外的基準(目的変数)の示すどのグループに属するかを決める手法である(新村1997)。)

<7> 判別分析の結果から得られたイントネーション型の談話ごとの分布や談話ごとの韻律的特徴の数値データをもとに主成分分析及び因子分析を行い、「話調」の韻律面の実態を明らかにした。

以上の<1>～<6>までは第3章、<7>は第4章にあたる。なお、第2章は「話調」研究の具体化の一例として、いわゆる「尻上がり」イントネーションに関する音響音声学的考察および社会言語学的考察を行い、第5章では各章の結論と、近年の認知言語学の成果を踏まえた上でイントネーションの離散性の問題、談話における韻律構造、及び「話調」の言語学的な実態を本研究なりに総括した。

## 1-6. 本研究の位置付け

本章の最後に、本研究のイントネーション研究史上における役割と今後の課題について考える。

本研究は、これまで体系的に記述されることのなかった非文末のイントネーションである、いわゆる「尻上がり」イントネーションを、談話と韻律研究の接点として位置付け、その音調や機能について客観的かつ実証的に記述した点に第一の意義があると言える。

そして日本語のイントネーションの分類、記述方法について共通の見解のない中、イントネーションのより客観的な類型化のための方法を提示した点に本研究の第二の意義がある。ある程度の量の、物理的、客観的データを統計処理して判別分析を行い、イントネーションを分類するという方法は画期的である。従来の類型や記述と違い、客観データに基づく分類であるため、検証が容易で、さらに資料を増やして検討することも可能である。本研究で扱わなかったイントネーションの「型」や今後出現するかもしれない新しい「型」についても、ある程度の量の音声データが揃えば同様に分析

することができる。ただし判別分析の結果と一般の人の聴覚的印象がどの程度一致するか確認するための聴取実験は、今後の課題である。また、本研究で扱った場面は限られているため、日本語の話されている場面全体を十分把握しきれたわけではない。もっとも身近な日常会話が分析対象から外れてしまったのは悔やまれる。将来的には社会関係、性別、年代など様々な組み合わせの対話者間で、様々な談話種別ごとに、体系的な研究を行っていかねばならないだろう。

しかし、限られた範囲とはいえ、文末のイントネーションだけでなく、PPU末ごとのイントネーションを対象にし、談話ごとにそれらのイントネーションやポーズの現れ方、発話速度などの韻律的特徴を客観的に比較した意義は大きい。「話調」がどのように形成されているのか実証的に示すことが可能になった。具体的存在として「話調」を客観的に捉え得るということは、単に談話のバリエーション研究や談話におけるイントネーション研究に資するばかりではない。「口調」や「話し方」などが客観的、科学的に扱えるということも意味する。

「文法」や「敬語」に比べ、「話調」そのものと密接に関連する「口調」や「話し方」は、いわゆる「尻上がり」イントネーションなどに代表されるように、一般には感情的、主観的に扱われる傾向がある。「頭の悪そうな話し方」や「生意気な口のきき方」などと言われる場合は、話している内容は問題にされないことが多い。ところが、第2章で明らかにするが、それぞれの「話し方」には、それぞれに合理性や社会言語学的な意味があることが普通である。またこのような主観的、感情的な「言外の言」の伝達にこそ、ある意味で言葉の、特に日本語の本領があると考えられる。ともすれば、主観的、感情的な言説に流されがちで、従来の言語学、日本語学では扱いにくかった、このような日本語のinteractionalな側面を、客観的かつ科学的に凝視することは、社会言語学の責務だと考える。

本研究第3章、第4章では実測データをもとに、できる限り客観的に音声談話を扱い、それぞれの談話ごとの韻律的特徴を明らかにした。第5章では、これらの結果を踏まえ、イントネーションの離散性と連続性の問題について主にプロトタイプ・カテゴリーの理論的知見を参考に検討し、「話調」の問題を日本人の言語意識、場面意識の問題に関連付けて考察した。先に述べたような課題も多々あるが、本研究では談話の社会言語学的研究を進める上での一つの枠組みを提示し得たと言えるだろう。